

論文

株宏の禅思想

苑 克 柱

〔抄録〕

株宏は禅浄双修を提唱する代表的な人物である。株宏の禅浄双修をめぐっては、これまでに賛否両論があって、その評価は一致していない。

本稿は株宏禅思想の分析を通し、株宏の禅浄双修論の提唱が彼の頓悟への理解に関わっていることを指摘する。より深層的な原因は、明代禅はすでに唐宋時代の活気を失い、弊害が叢生していたことである。批判者は株宏の双修論は禅の本来的な特色を喪失させることになったと非難したが、株宏の禅浄双修の提唱は、むしろ禅宗の弊を救おうとしたことによるのであって、それを無視してしまっているのである。

キーワード 株宏 禅浄双修 頓悟漸修論 白隠

一 明末の禅復興の先駆

清初の曹洞宗の禅匠の覚浪道盛（1592-1659）は、次のように明末三大師を評価している。

當宗門凋落之際、憨山與雲棲達觀稱三大師、相為鼎立、以悟宗門之人、不據宗門之位⁽¹⁾。宗門が凋落する際、憨山・雲棲・眞可の三大禅師は互いに鼎立し、宗門の人を悟らせたが、宗門の立場には依拠しなかった。

明代末年に、臨済・曹洞両宗の門下においては、宗匠が輩出され、禅風が大いに扇いであり、銭謙益に「二百年來、傳燈寂蔑 二百年以来、伝灯は途絶えようとしていた⁽²⁾」と称された禅宗は、復興の勢いを見せた。時人に禅風の盛は「復追唐宋盛時 また唐宋の盛時を追う⁽³⁾」と称されるに至った。この過程は清初の康熙乾隆年間まで続き、禅宗の近代における黄金時代である。

明末の禅風の先を開いたのは、明末三大師である憨山徳清（1546-1623）・雲棲株宏（1535-1615）・紫柏眞可（1543-1603）である。三大師は若くして禅門を出入したことがあり、参禅開悟の経験を持っており、彼らは法脈師資相承を認めようとしなかったため、後世の禅宗灯譜の

中では、往々にして法嗣不明者と判定されている。

三大師のうち、眞可と憨山は生前すでに禅師の面目で出現し、彼らは生前身後みな禅門の人物と評価されている。そして株宏は生前に浄土信仰を弘め、後世も蓮宗祖師と目されている。ただし、株宏が編集した禅修の入門書である『禅関策進』は、明末の禅林全体に影響を及ぼしただけでなく、今日においても、なお禅修の指南書とされている。彼の禅門への影響は、他の二大師と比べて少しも遜色がない。

二 禅の遍歴

憨山は株宏のために作った「塔銘」の中で、次のように株宏の早期の行脚参訪の経歴を記している。

單瓢隻杖遊諸方、遍參知識。北遊五臺、感文殊放光。至伏牛、隨眾煉魔。入京師、參遍融笑巖二大老、皆有開發。過東昌、忽有悟。作偈曰、二十年前事可疑、三千里外遇何奇、焚香擲戟渾如夢、魔佛空爭是與非。（中略）至金陵瓦官寺、病幾絕。時即欲以就茶毗者。師微曰、吾一息尚存耳。乃寢病間歸。越中多禪期、師與會者五、終不知鄰單姓字⁽⁴⁾。

單瓢隻杖で四方を遊化し、あまねく善知識のもとに参じた。五台山を北遊し、文殊菩薩が放つ光明を感得した。伏牛に至り、大衆に随い煉魔した。国都に入ると、徧融・笑岩の二大老のもとに参じ、どちらからも得るところがあった。東昌にいたり忽ち悟りを得た。偈を作って言うには、

二十年前より事疑うべきも 三千里の外に何の奇に遇わん

香を焚き戟を擲つこと渾て夢の如し 魔と仏と空しく争うは是と非

（中略）金陵の瓦官寺に至り、病を患って命は尽きようとした。執事は彼を荼毘させようとした。師は「私はまだ一息だけ残っている」と言っ、病を患いながら帰ってきた。浙江には禪期が多く、師は参加すること五回、終わりまで臨単の名前さえ知らなかった。

以上の憨山の記述によって、概ね株宏の参訪経過を描き出すことができる。ここでさらに詳しく確認していきたい。

①北遊五臺、感文殊放光

五台山は唐代以来、文殊菩薩が応化する聖地として、北方の仏教信仰の一大中心地である。三大禅師のうち、憨山は五台山ととくに仏縁が深い。彼は五台山に住み修道すること八年、憨山を取って自らの号とした。万曆九年に、憨山と妙峰は五台山で無遮大会を建立し、皇室のために祈嗣した。

株宏は生涯を通して五台山を二回朝礼している。「塔銘」に記されているのは一回目であり、具体的な年次は不明である。株宏が二回目に五台山を朝礼した時、愍山に出会い、愍山に引き留められて十日余り滞在している。その年は万曆四年（1576）であり、株宏は四二才で、愍山は三一才であった。

②至伏牛、隨眾煉魔

明中後期に、北方の仏教が盛んになり、河南省の伏牛山・北京は共に当時の有名な仏教隆盛の地であった。とりわけ河南伏牛山は、煉魔（鍊磨ともいう）打七で有名な地域であった。明中後期に活躍した高僧、例えば笑岩徳宝・雲棲株宏・愍山徳清・紫柏眞可など、そこに参学しなかった者はいないほどである。株宏の早期の禅修活動は伏牛山と大きな関連を持っている。株宏は伏牛山で煉魔打七する時の様子を回顧して以下のように述べている。

一冬之期、先致米一石於常住、而晝夜鞭逼念佛、無斯須停息。仍每日必負薪、或遠在十餘里之外、打七然後暫免⁽⁵⁾。

冬の打七の時期になると、先ず一石の米で寺院常住に供養する。打七の期間中に、昼夜を通して念仏を精励し、一刻の休みもなかった。また毎日薪を負い、時には十数里も離れた場所まで行く場合もある。打七になってはじめて暫く免除される。

明代に、宋元以来の結冬規制は次第に定型化されてきて、煉魔打七は結冬の期を選んで行う。この打七は七日を一期とし、昼夜を通して念仏を精励し、精進して眠らずに行われていたので「瞠眼七」とも呼ばれた。一七日の他、二七日、三七日の念仏、ないし三ヶ月を満たす念仏もある。後世の禅門に流行した打禅七、及び浄土宗の打念仏七は、みなここより発生したものである。呉孟謙氏の研究によれば、煉魔打七は明初に起源をもち、伏牛山の独空（1334-1406）は最初の提唱者であるという⁽⁶⁾。

③入京師、參遍融笑巖二大老

株宏の時代に、徧融（弁融、1506-1584）・笑岩（1512-1581）の二大師は北京に駐錫し、大いに宗風を扇いでいた。徧融は華嚴を弘め、笑岩は禅法を弘め、共に当時の有名な宗匠であった。株宏の他、愍山・眞可もこの二老のもとに参じ、彼らの教導を受けたのであった。

株宏は生涯を通して徧融と笑岩に二回参じた。隆慶年間の今回の参訪は初回である。

株宏は徧融に参じ、徧融は本分を守り、名利を貪らず、因果を分明し、一心に念仏するように開示した。

株宏が笑岩のもとに二回参じているが、その時間はともに短くて、法兄の幻有正伝（1547-1614）のように笑岩に常侍したわけではなかった。笑岩は幻有に伝法し、明末の臨濟一宗の正

脈を開いた。株宏は笑岩に参じた帰途で悟りを開いたものの、笑岩より当面の印可を受けなかったもので、無師自悟と目されている。したがって、後世の禅宗の灯譜の多く、例えば通容の『五灯厳統』、通問の『続灯存稿』、性統の『続灯正統』、超永の『五灯全書』などは、みな株宏を法嗣不明者に列しているのである。

④至金陵瓦官寺、病幾絶

株宏の南京瓦官寺における参学も伏牛山に関わっている。『金陵梵刹誌』によると、明末に、山西出身の比丘覚恒は伏牛山に赴き、印空和尚に二〇年余り師事し、のちに四方に周遊し、金陵（今の南京）に至り、地元の田紳に引き留められ、遂に古瓦官寺を復興し、弟子の悟迎を度し、のちに伏牛山に帰ったという。瓦官寺は全部ではなくても、おそらくは部分的に伏牛山の煉魔打七の規制を移植しただろう。覚恒が住持した期間中に、瓦官寺は一時当時の有名な修行道場になっていた。『金陵梵刹誌』は当時の盛況を記述して次のように述べている。

其後羣弟子、自四方來、武林株宏為上首⁽⁷⁾。

その後、参学の弟子は四方よりやって来た。中でも杭州の株宏は諸弟子の上首である。

株宏が瓦官寺で伏牛山の覚恒に師事したことがわかる。恐らく株宏は伏牛禅において打七した時に、すでに覚恒と知り合っていたのかもしれない。その時、株宏は叢林の中ですでに名声が高まっており、諸弟子の中の上首であった。

⑤寢病間歸、越中多禪期、師與會者五

浙江省は株宏の出身地であり、布教の有縁の地でもある。株宏はここで出家、受戒し、またここで布教し生涯を閉じた。株宏は病をかかえながら浙江に帰った後、数回の禅期に参加した。この禅期については、その詳細は不明である。株宏はのちに「放参飯」という文を書き、禅期中の経験を回顧し、当時の禅期では夜中に齋を作り放参飯を食べることが不如法であると批判している。株宏は確固たる持戒主義者であり、禅門の乱象を辛辣に批判したのである。

三 禅弊の修正

株宏は若くして行脚参学し、参禅悟道を以て修行の中心としていた。そもそも禅宗は六祖以後五家七宗へと展開し、唐宋時代には一時の隆盛を極め、諸宗を冠蓋した。しかし、宋代以降、次第に頹勢が顕著になってきて、弊害もそれにともなって現れ出てきた。株宏は禅林を出入して、当時の禅門の凋弊を目睹し、これらの弊害の矯正に尽力した。

明末に、禪宗は唐宋時代の眞修実証の精神を失い、それに取って代わったのは禪人が文字禪・口頭禪を把弄して光景としたことである。

文字禪は宋代に起源し、代別・頌古・評唱などの形式がある。これは実は公案禪に対する一種の講解である。祖師禪が出現した後、禪師らが悟りを開いた後、残した機鋒問答は公案と称される。公案自体が禪師の禪境の体験であり、それを集約し難いことから、宋代の禪匠は文字の形でそれに解説を加え、繞路説禪（遠まわしで独特な表現をもって禪を解説すること）をした。宋代に、文人士大夫が仏法を参究するのが非常に普遍的であり、文字禪は彼らに好まれていた。恵洪は有名な文字禪の提唱者である。明代に、眞可は文字禪を提唱するのが最も有力であるとして、以下のように述べている。

禪如春也、文字則花也。(中略) 禪與文字、有二乎哉⁽⁸⁾。

禪は春のようである。文字は花のようである。(中略) 禪と文字は、異なりがあるのか。

株宏は、禪の眞精神は参悟にあり、道破してはならないと考えている。経律論には意味の筋道があるので、解説しないかぎり不明瞭のままであるが、禪には筋道がないので、解説を加えるとかえって晦昧になってしまう。文字で禪を説くのは、衆生の悟門を塞ぐことになる。宗門の衰敗が、禪を説く人によってもたらされているのであると考えた⁽⁹⁾。株宏は実修を疎かにし、ただ口頭で禪を説く禪人に対して、本末顛倒であり、仏法を壊乱したと批判している⁽¹⁰⁾。雲棲寺においては古徳因縁を妄拈することが禁止されており、違反すれば出院することになっていたほどである⁽¹¹⁾。

文字機鋒に沈溺することに反対するのは、経教への軽視である。禪宗は教外別伝を標榜する。六祖以後、禪宗は次第に文字を脱離してきて、盲修暗証の弊が出てきた。株宏は教を離れて修行することは邪因であり、教を離れた悟りは邪解であり、たとえ参禪して悟りを開いたとしても、経教で印心する必要があると考えている⁽¹²⁾。『雲棲共住規約』では、出家して受戒した後、五夏以前戒律を精通し、教理を通暁してはじめて参禪が許可されるよう規定されている⁽¹³⁾。

教禪一致は中唐の宗密(780-841)によりはじめて提唱され、永明(904-975)を経て、蔚然として一大宗が形成された。株宏の教学は宗密の影響を深く受けており、その教禪一致論は宗密・永明と一脈相承している。宗密においては、禪と教との地位は全く対等である。而して株宏は教を強調すると同時に、禪により着力している。

禪教如目足相資、但以修禪為主、而明教輔之可也⁽¹⁴⁾。

禪と教とは目と足のように相い資するといえども、修禪を主とし、明教を輔とするべきである。

明末に、棒喝は禅法を知らない人に濫用されていた。元賢（1578-1657）は当時の様子を指摘して以下のように述べている。

有纒著袈裟、便行棒喝者。問之、則曰臨濟宗也⁽¹⁵⁾。

袈裟を着たばかりで棒喝を行う者がいた。問われたら、「われわれは臨濟宗のものである」と言った。

今行棒行喝、豈但曰初披袈裟。即白衣居士例皆如此⁽¹⁶⁾。

現在、棒を行い喝を行う者は、袈裟を身に着けたばかりの僧侶だけでなく、在家居士ですらもいる。

これに対して、株宏は棒喝が機に応じて教を施すべきであると指摘し、彼は禅機を知らず、棒喝を濫用した、顰に倣う輩を「以打人為事」（人を殴ることばかりする⁽¹⁷⁾）と呵斥した。

株宏が指摘して矯正した禅の弊害は、特定の人に的を絞ったものではない。これらはみな当時の禅林に流行していた普遍的風気であり、中から明末の禅林の面貌の一斑が垣間見られると言えるのである。

四 以悟為則と頓悟漸修論

株宏は狂偽混濫の禅の弊害を喝破し、以悟為則の原則を提示した。以悟為則はもとより唐代の滄山（771-853）によってはじめて提示されたものである。『禅関策進』においては、以悟為則は滄山・高峰・仰山古梅友・毒峰の語録の中にみな示されている。株宏の自説として、株宏の著作には三ヶ所がある。

①『禅関策進』の「滄山警策」条の「研窮法理、以悟為則」句の下で、株宏は評述して以下のように述べている。

則、準也、以悟為準的也。即宗門謂參禪到甚麼處、是歇工處。今言大悟乃已不悟不已也⁽¹⁸⁾。

則とは、準の意味であり、悟を以て準則とするなり。即ち宗門が言う「参禅はどこまで至れば休歇処であろうか」。今言う、「大悟は休歇処であり、悟らないと止まらない」と。

②朱白民への開示の中で、次のように述べている。

参禪別無方便、只貴諦信不惑。如滄山所謂研究至理、以悟為則而已⁽¹⁹⁾。

参禅には別の方便はない。大切なのは、諦信して疑惑を起こさないことである。滄山が言

うように、理を究めて研究し、悟を以て則とする。

③何武峨への開示の中で、株宏は一代仏法を三門に帰結し、そのうちの参禅門について次のように述べている。

参禅門 以悟為則。而止觀亦具其中⁽²⁰⁾。

参禅門 悟を以て則とする。而して止觀もその中に備わっている。

株宏が繰り返し開悟を参禅の準則とすることを提示することも、当時の禅弊を対治するためである。明末の禅林では、禅人は往々にして少を得て足とし、それに加えて明眼の善知識が乏しく、盲目の長老に会い、冬瓜印子で印され、大徹大悟をしたと思ひ込んだ。株宏はこれに対して痛心を極め、「一盲衆盲 一盲が衆盲を導く⁽²¹⁾」と言った。

明末に、禅宗は隆盛時期の孤危高邁を失い、漸修論が台頭し始めた。株宏、智旭（1599-1655）などは次々と頓悟と漸修を調和させた。株宏は、

昔一友人謂予曰、今人見六祖道本來無一物、何處惹塵埃、便將神秀時時勤拂拭之句藐視如一莖草、不知時時拂拭正學者今日事也。予深善其說⁽²²⁾。

かつて友人の一人が私に言うには、今の人は六祖が言う「本来無一物、何處惹塵埃」を見て、神秀の「時時勤払拭」の句を蔑視すること、あたかも一本の草と同じような扱いをしているが、「時時勤払拭」こそ学者が現在大事にすべきことであると理解していない。私はその説に賛同する。

と述べている。

漸修論が台頭する雰囲気の下で、中唐の宗密が提唱した頓悟漸修論は再度登場した。株宏は瀉山の語を引いて次のように述べている。

瀉山和尚云、如今初心、雖從緣得一念頓悟自理、猶有無始曠劫習氣未能頓淨、須教渠淨除現業流識、即是修也。不道別有法、教渠修行趨向。瀉山此語、非徹法源底者不能道。今稍有省覺、便謂一生參學事畢者獨何歟⁽²³⁾。

瀉山和尚が言う、今日の初心者は、縁に遇い一念の頓悟の理を得ているとも、無始曠劫以来の習気がまだ残っている。百尺の竿頭、さらに一步を進め、現業流識を斷除すべきである。これこそ修である。これを捨てて別に法があり、あなたに修させるのではない、と。瀉山の言葉は、法源に至っていない者には説けない。今の禅人は、少し省覺を得ただけで、一生の参学の事が終わったと言っている。それはなぜだろう。

明代の浄土教者の頓悟漸修論⁽²⁴⁾は、自心を頓悟した後、まだ現行煩惱習気が残っており、対治する必要がある。ほんの少しの習気が断じ切れないとしても、生死を離脱することはできないと主張している。例えば、智旭は『阿弥陀経要解』の中で次のように述べている。

叢土自力修行、生死關頭最難得力。無論頑修狂慧、懣懼無功。即悟門深遠操履潛確之人、儻分毫習氣未除、未免隨強偏墜。永明祖師所謂十人九蹉路、陰境若現前、瞥爾隨他去。此誠可寒心者也⁽²⁵⁾。

穢土で自力で修行する場合、生死の瀬戸際で最も力を得難い。頑修、狂慧の者はもちろん、彼らは普段から真の修行がなくて、臨終時になると成果がないことを慚愧する。悟門深遠、操履潛確の人であるとしても、ほんの少しの習気も断じ切れないならば、業力の強い方に随って輪廻に墮ちる。永明祖師が言う、「禅があっても浄土がなき者は、十人に九人は路につまづく。陰境もし現前すれば、すぐさま他に随って去る」と。これは本当に恐ろしいことである。

頓悟漸修論と浄土信仰とが相い結合することによって、必然的に禅浄双修と禅浄同帰に導かれるのである。

五 禅浄双修と禅浄同帰

宋代以来、禅浄融合は次第に潮流になってきた。永明（904-975）・中峰（1263-1323）・惟則（1263-1323）などの諸禅匠はみな禅浄同帰を唱導した。中峰・惟則においては、禅浄同帰は禅と浄土との究竟帰趣の一致を指し、即ち、みな成仏を目指す（禅浄同帰解脱）とした。しかし、法門選択上、一門専修すべきであって、混濫してはいけない。中峰・惟則の基本立場は禅宗であり、念仏を弘めるのは中下根機を摂引する方便としてであった。中下根機に対して、彼らに往生浄土を勧めても差し支えないが、上根人に対して、彼らに直悟禅宗を勧めている。念仏と参禅の両者は兼修してはいけないという理解である。

株宏は中峰・惟則の禅浄同帰に賛同した。彼は最終帰趣上、両者は矛盾しないと考え、禅浄を調和することを意図した。

禅宗浄土、殊途同歸。以不離自心、即是佛故、即是禅故⁽²⁶⁾。

禅宗と浄土宗は、修行の方法は異なるが、帰趣は同じである。なぜなら、自心を離れず仏であるため、禅であるためである。

株宏の禅浄同帰には、もう一つの立場がある。彼は参禅をするにせよ、念仏をするにせよ、

最終的には西方浄土に往生する必要があると考える（禪浄同帰西方）。株宏は参禪で悟りを開いたとしても、必ずしも解脱したとは限らず、ちょうど浄土を求生すべきと考える。それゆえ、参禪で悟りを開いた人であれ、まだ悟りを開いていない人であれ、みな浄土に往生すべきである。よって、株宏は禪浄双修を主張し、念仏と参禪とは兼修しても差し支えないと考えた。

圓頓行人、雖悟一心、尚餘後有。正宜求生彼國、親近彌陀⁽²⁷⁾。

円頓の行人は、一心を悟ったといえども、まだ後有が残っている。正しく彼の国を求生し、阿弥陀仏に親近すべきである。

真信浄土、決志往生者、不論已悟未悟。其從事單傳直指、而未悟者、雖目以參禪為務、不妨發願往生。以未能不受後有、畢竟有生處故。不是偷心岐路心也。其已悟者、古人云、汝將謂一悟便可上齊諸佛乎。故普賢為華嚴長子、雖塵塵華藏、在在蓮邦。(中略) 已悟尚然、未悟可知矣⁽²⁸⁾。

ほんとうに浄土を信じ、往生の志が固まっている者は、已悟と未悟とを問わない。その単伝直指に従事して悟らない者は、参禪を要務とするといえども、発願して往生しても差し支えない。後有を受けないに能わず、畢竟生まれるところがあるためである。偷心、岐路心ではない。悟った者に対して、古人は言うに、あなたは悟った後、諸仏と等しくなることができると思っているのか、と。故に、普賢は華嚴の長子として、華嚴海会の四十一位菩薩を引導し、彼らを勧めて極楽に往生せしめた。(中略) 悟った者ですら往生を発願した。ましてや悟らない者は言うまでもない。

株宏が禪浄同帰西方を主張するのは、実際は禪宗を浄土教の中に融摂した。禪宗の正統の立場に立つならば、参禪で悟りを開き、すでに唯心浄土を証しており、さらに西方浄土に往生する必要がない。これは六祖以来の純禪の基本的立場である。永明四料簡の「有禪有浄土」偈は、禪宗を悟った者が浄土に往生し、成仏作祖することを主張している。惟則は禪浄双修に反対するが、悟後の浄土往生も鼓吹した⁽²⁹⁾。永明・惟則は実は六祖の立場から離脱していたのである。

では、中峰の立場はどうか。もし大悟以後も浄土に往生する必要があることを認めるならば、禪宗の開悟はまだ円満でなく、究竟でないことを表明することになる。そうであるならば、参禪は偷心に堕ちてしまう。

中峰の語録の中に、大悟の人でも西方に往生する必要があるといった語句は見られない。これに反して、中峰は永明の四料簡を評価して次のように述べている。

夫永明揀禪淨土為四句、乃曲徇機宜、特方便抑揚耳⁽³⁰⁾。

永明の禅淨四料簡は、機根に準拠しており、特に方便を作って止揚するに過ぎない。

但悟自心之禪、即其三界萬法混入靈源。舉必全真、初無揀擇。既無東西兩土之殊、安有淨穢二邦之異⁽³¹⁾。

もし自心の禅を悟ったならば、三界の万法は靈源に混入する。挙手投足は、一つとして真如実相でないものはない。東西両土の差別がない以上、どうして浄土と穢土の異なりがあるだろうか。

中峰にとっては、大悟以後、すでに一踏到底しており、さらに履踐（漸修）を立つ必要はない。もしまた履踐があるならば、悟心がまだ円満でないことになる。それゆえ、悟後の往生はまったく戯論である。

心外無法、法外無心。若見有纖毫情習未盡、即是悟心不圓而然也。或心悟不圓、須是掃其未圓之跡、別立生涯以期大徹可也。其或謂悟心未盡、以履踐盡之、如抱薪救焚、益其熾矣⁽³²⁾。

心外に法なし、法外に心なし。もしいささかの情習が尽きないのを見たら、それは悟心が円満でないことによる。或は心悟が円満でないと、その不円の跡を掃き、別に生涯を立ち、徹悟を求めるべきである。或は悟心が尽きないので履踐を用い尽くさせるという。それは薪を負って消火するも、火がますます燃え上がるようなもの。

六 株宏禅思想の批判

日本承応三年（1654）、隠元（1592-1673）は日本に赴き伝法し、黄檗一宗を開創した。黄檗宗の禅修は、鮮明な明末仏教の禅淨双修の特色を帯びており、当時の日本の禅林に大きな衝撃を与えた。禅宗門庭を守る立場により、臨済宗の白隠慧鶴（1685-1768）は、禅淨双修を提唱した株宏・元賢に猛烈な批判を展開した。

流へて大明の末に至って、雲棲の株宏なる者あり、参玄力足らず、見道眼暗ふして、進むに寂滅の楽なく、退くに生死の恐あり、悲嘆押へ難く、終に遠公蓮社の遺韻を慕ふて、祖庭孤危の眞修を捨て、自ら蓮池大師と稱して彌陀經の疏鈔を造り、大に主張して後學を引く。鼓山の元賢永覚大師、淨慈要語を造って擊節して輔け佐く。此に於て漢土に普く扶桑に溢れて、終に救ふことなきに至る⁽³³⁾。

大明朝の末年に至ると、雲棲株宏という人が出て、参禅の力が足りなくなり、また道眼が

不明となり、進むに寂滅の快樂がなく、退くに生死の恐怖がある。悲嘆して抑え難く、ついに慧遠の白蓮社の芳躅を慕い、禪祖の孤危の真修を捨て、自ら蓮池大師と称し、『阿弥陀経疏鈔』を著し、浄土を主張し後学を接引した。鼓山の永覚元賢大師は、『浄慈要語』を著し、撃節して輔佐した。その後、この風は中国に普及し、日本に氾濫し、ついに抑えられなかった。

白隠は念仏人の念仏行に反対しなかった。彼が反対したのは、参禅人が参禅に不徹底さがあると考え、転じて念仏を兼修することであった。そうしなければ、参禅はきっと偷心に堕ちり、禅宗は転覆の恐れがあると判断した。

有一般、三五七年辦道参禅、而工夫不純、精神不一故、終不打發。雖重歲月、進無寂滅樂、退有生死怖。於此專念佛名、切求淨刹托生。参究心乍廢、辦道心俄罷。宋明末、此黨大興、多是庸才惰弱禪徒也。(中略)夫禪外無淨刹、禪外無心、禪外無佛⁽³⁴⁾。一類の人がおり、三五七年も修道して参禅したが、工夫が足りず、精神が不専一なので、進捗はちっともない。歳月を重ねるが、進むに寂滅の快樂がなく、退くに生死の恐怖がある。ここにおいて仏名を専念し、切に浄土往生を求める。参究の心が廃棄し、修道の心が退失した。宋明末に、このたぐいの徒党が盛んになり、その多くは庸才惰弱の禅徒である。(中略)禅以外に浄土なし、禅以外に心なし、禅以外に仏なし。

一宗一派の得失の立場に立てば、白隠の批判にはそれなりの正当性があることは疑いない。現代の研究者の中には、禅浄双修の風気が株宏により頂点に達したが、株宏においては禅本来の立場がすでに面目を全失してしまっていると考える者もいる⁽³⁵⁾。しかるに、株宏の立場は一家の興衰得失に拘らず、彼は仏教全体の立場に立ち、末法に身を置く吾人に直捷究竟の解脱の道を探求しようとした。株宏の禅思想の出発点と帰結はここにあり、株宏の教学全体の出発点と帰結もここにある。

〔注〕

- (1) 道盛「憨山大師全集序」、『嘉興藏』第34冊、714頁下。
- (2) 銭謙益「紫柏尊者別集序」、『卍統藏経』第73冊、401頁上。
- (3) 清紀蔭「宗統編年」、『卍統藏経』第86冊、298頁中。
- (4) 憨山「古杭雲棲蓮池大師塔銘」、『嘉興藏』第33冊、194頁下。
- (5) 株宏「竹窓三筆・簡藏鍊磨」、『嘉興藏』第33冊、70頁中。
- (6) 呉孟謙「独空禅師と明代伏牛山の鍊磨場」、『国際禅研究』巻2、2018年。
- (7) 『金陵梵刹誌』第21巻、『中国佛寺誌叢刊』第24冊、広陵書社、2006年、917頁。
- (8) 紫柏「石門文字禅序」、『卍統藏経』第73冊、262頁中。
- (9) 「宗門之壞、講宗者壞之也。(中略)經律論有義路、不講則不明、宗門無義路、講之則反晦。」株宏『竹窓三筆・講宗』、『嘉興藏』第33冊、58頁上。

- (10) 「古人一問一答、皆從真實了悟中來。今人馳騁口頭三昧、若不禁止、虛頭熾而實踐亡。子以為宗門復興、吾以為佛法大壞也。」株宏『竹窓三筆・妄拈古德機緣（一）』、『嘉興藏』第33冊、59頁上。
- (11) 『雲棲共住規約』上、『嘉興藏』第33冊、163頁上。
- (12) 「其參禪者、藉口教外別傳。不知離教而參、是邪因也。離教而悟、是邪解也。饒汝參而得悟、必須以教印證、不與教合悉邪也。是故學儒者、必以六經四子為權衡。學佛者、必以三藏十二部為模楷。」株宏『竹窓三筆・經教』、『嘉興藏』第33冊、32頁上。
- (13) 『雲棲共住規約』上、『嘉興藏』第33冊、164頁中。
- (14) 『雲棲大師遺稿』卷2、『嘉興藏』第33冊、133頁中。
- (15) 元來『無異禪師廣錄』卷23、『卍統藏經』第72冊、327頁中。
- (16) 同上。
- (17) 「古人棒喝、適逗人機、一棒一喝便令人悟、非若今人以打人為事。」『雲棲大師遺稿』卷3、『嘉興藏』第33冊、146頁中。
- (18) 株宏『禪関策進』、『大正藏』第48冊、1108頁下。
- (19) 『雲棲大師遺稿』卷3、『嘉興藏』第33冊、144頁下。
- (20) 『雲棲大師遺稿』卷3、『嘉興藏』第33冊、141頁上。
- (21) 「今人或得一知半見、或得些少輕安、便自以為大悟大徹。而無眼長老又或以東瓜印子印之、一盲眾盲。」株宏『竹窓三筆・伝灯』、『嘉興藏』第33冊、63頁下。
- (22) 『雲棲大師遺稿』卷2、『嘉興藏』第33冊、131頁下。
- (23) 株宏『竹窓隨筆・悟後』、『嘉興藏』第33冊、26頁上。
- (24) 明末の頓悟漸修論には、さまざまな立場があり、宗密の頓悟漸修論の焼き直しのわけではなかった。詳しくは荒木見悟の所論を見る（『仏教と陽明学』、第三文明社、1979年、141～151頁）。ここで言う頓悟漸修論は、浄土教者の立場である。
- (25) 智旭『阿弥陀経要解』、『卍統藏經』第61冊、655頁中。
- (26) 株宏『阿弥陀経疏鈔』卷1、『卍統藏經』第22冊、606頁中。
- (27) 株宏『阿弥陀経疏鈔』卷3、『卍統藏經』第22冊、658頁中。
- (28) 『雲棲大師遺稿』卷3、『嘉興藏』第33冊、138頁下。
- (29) 「悟達之士政願求生。古人云、不生浄土、何土可生。汝但未悟、使汝既悟、則汝浄土之趨萬牛不能挽矣。」惟則『浄土或問』、『大正藏』第47冊、292頁下。
- (30) 明本『天目中峰和尚広録』卷11、『大藏経補編』第25冊、796頁中。
- (31) 同上、797頁上。
- (32) 同上、806頁上。
- (33) 『遠羅天釜』、『白隠和尚全集』第5巻、龍吟社、1934年、25頁。
- (34) 『息耕録開筵普説』、『白隠和尚全集』第2巻、龍吟社、1934年、27～28頁。
- (35) 「禅浄双修は雲棲株宏によって完成を見たとよすが、そこでは、唐代に確立された禅本来の立場はすでに見る影もなくなっている。禅は既に瀕死の状態にあったのである。」伊吹敦『中国禅思想史』、禅文化研究所、2021年、650頁。

【参考文献】

- 荒木見悟 1979 『仏教と陽明学』、第三文明社。
呉孟謙 2018 「独空禅師と明代伏牛山の鍊磨場」、『国際禅研究』巻2。
伊吹敦 2021 『中国禅思想史』、禅文化研究所。

（えん こくちゅう 文学研究科仏教学専攻博士後期課程）

（指導教員：齊藤 隆信 教授）

2022年9月30日受理